講　演

「イミタティオ・クリスティ」から「こんてむつすむん地」まで

――〝De Imitatione Christi〟（『キリストに倣いて』）とイエズス会と日本のキリシタン――

五野井　隆　史

はじめに

ザビエルが1549年に鹿児島において初めてキリストの教えを説いて以来，1644年に最後の宣教師の捕縛によって宣教活動が終わるまでの約100年間に，キリシタンが信仰の糧とした書物は，教理書の『ドチリナ・キリシタン』，『コンテンツス・ムンヂ』，『聖人伝』であった。これらの書物は，1590年に遣欧天正使節が活字印刷機を将来してきたことにより印刷されたから，多くのキリシタンはそれらをじかに手にとって読み信仰を堅めるよすがとした。一方，「聖書」は印刷されることなく，その成句は宣教師の口から直接宣べ伝えられ，また主日のミサにおいて福音書の数節が語られ，それについての講話がなされた。そのことは，1590年に来日した若きポルトガル人司祭マノエル・バレトが編集した「バレト写本」(『キリシタン研究』 7に原文が翻字され，また影印が収められている。ただし「聖人伝」は省かれている。）によって知られる。従って，新しい宣教地日本での宣教は基本的には教理書がキリシタン信仰の形成に大きな役割を持ち，それを側面から支えたのが修養書の『コンテンツス・ムンヂ』と『聖人伝』であったと言えるようである。ここでは，先ず『ドチリナ・キリシタン』と『聖人伝』について言及したのち，『コンテンツス・ムンヂ』の元本である「イミタティオ・クリスティ」がどのような経過を経てイエズス会と関わっていったかについて見，さらに日本における流布の状況について概観する。

１．『ドチリナ・キリシタン』と『聖人伝』

日本におけるキリスト教の教理教育は，ザビエル編集の「29ヵ条の教理書」(G.Schurhammer S.J. et J.Wicki S.J., Epistolae S.Francisci Xaverii aliaque eius scripta. Tomus I. 1944. p.93-116. 河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』(平凡社，1985 年）では，「キリストの教理［短い公教要理］」として訳載）によって始まった。ザビエルはジョアン・デ・バロス作成の「教理」を改変し，さらに新たに 11ヵ条を付け加えた。鹿児島においてパウロ・アンジローの助けを得て日本語に翻訳し，山口滞在中にこれを漢字に書き改めたとされる。

1556 年 7 月に豊後府内を訪れたインド管区副管区長ベルシオール・ヌーネス・バレトはザビエルの教理書を改訂し，パードレ・バルタザール・ガーゴを指導して「25ヵ条の教理」を作成した。これは，フランシスコ・カブラルが布教長として来日した 1570 年頃まで使用されたが，1568 年にもたらされたマルコス・ジョルジェ作成の「ドチリナ・キリシタン」が日本の実情に合わせて編集しなおされた。これは「日本のドチリナ」と称され，その写本が広く流布するようになった。1590 年に活字印刷機が天正遣欧使節によって将来されると，これは，翌年肥前の加津佐で印刷に付された（国字本「どちりいな・きりしたん」)。1592 年にはローマ字本「ドチリナ・キリシタン」が天草で印刷された。

教理書『どちりいな・きりしたん』は，その序文において「御主ぜずきりしと」が在世中に弟子たちに特に教えられたことは，「一切人間に後生（来世）を扶かる道の真のおきてをひろめよとの御事」であったとして，それが三つの事に極まることであるとする。すなわち，「一には信じ奉るべき事，二にはたのもしくぞんじ奉るべき事，三には身持ちを以てつとむべき事」である。「信じ奉るべき事」とは，「ひいです（信仰）の善にあたる事」で，人間の分別を超えたものであり，このことを弁えないと後生の道に迷うことが多いという。「頼もしく思う事」とは，「えすぺらんさ（希望）の善にあたる事」であり，デウス（神）がキリシタンに与えた約束であるとする。このことを知らなければ難儀に遇ったとき，頼る所がないと思って心（望み）を失うこともあるという。「身持ちを以てつとむべき事」とは，かりたあて（かりだあで･愛）の善にあたる事」

であるとする。必読書の教理書を通じて，キリシタンたちは「信仰・希望・愛情」の三つの善徳がデウスの教えの根幹であることを強く認識していった。

1600 年に，国字本『どちりな・きりしたん』（後藤宗印版）とローマ字本『ドチリナ・キリシタン』の再版が出たが，国字本では文章は洗練されて簡潔になり的確な言葉が多く用いられている。キリシタンの増加に伴って本書の需要も増え，再版を期に手が加えられたのであろう。

1591 年に教理書『どちりいな・きりしたん』と同時に印刷されたのが，聖人伝『サントスの御作業の内抜書』である。活字印刷機来着後最初の出版物の一つに『聖人伝』が選ばれたのは，天正遣欧使節が帰国する 3 年前の 1587 年に発令された「伴天連追放令」によってキリスト教が禁止されていたために，その出版が急がれたという事情によったのであろう。『聖人伝』の内容のほとんどは，殉教伝である。宣教師たちはザビエルを始めとして，仏僧を含む異教徒たちからの迫害をつねに念頭においていたから，初期教会時代にエルサレムやローマで多く見られた殉教の数々について語って，日本の初期キリシタンたちに殉教に対する心の準備を促していたように思われる。

1559 年 3 月に博多で殉教した山口出身のアンドレは，エルサレムにおいて殉教した最初の殉教者聖エステヴァン（ステファーノ）を尊崇していて，聖エステヴァンがしたと同じように跪いて祈りながら殺された，とイルマンのジョアン・フェルナンデスは証言する（同人のベルショール・ヌーネス宛，1559 年 10 月 5 日，豊後発信）。アンドレはフェルナンデスあるいはコスメ・デ・トルレス神父から初期教会の殉教者の話を聞いていたに相違ない。

『聖人伝』に関する翻訳は早くから行われた。堺に住んでいた医師養方軒パウロは，すでに 1564 年にパードレ・ガスパール・ヴィレラを助けて「聖徒の華 Flor Sanctum」を日本語に翻訳したとされ，1568 年にはパードレ・ルイス・フロイスも日本人イルマン・ダミアンの協力を得て「若干の聖人伝」を訳した。また，1590 年に遣欧使節と共に来日したパードレ・マノエル・バレトは，日本語習得のために主日のミサに読まれた福音書の日本語訳を編集し，所謂，「バレト写本」を作成したが，その後半

部分には「サントス〈諸聖人〉及びサンタス（諸聖女）の栄光と生涯」と題した 32 編を収録した。翌年『サントスの御作業の内抜書』が印刷にされる準備はすでに整っていたということになる。

『聖人伝』は，殉教が神の証し人となる行為であることを初代教会における事績をもって証明して語り継いできたものであったから，キリシタンたちは十字架に付けられた神の子イエスの受難に思いを致し，イエスに倣って一命を捧げることを学んだ。彼らは宣教当初から読み聞かされた『聖人伝』を通じて信仰を高め堅めることが出来たが，これは，『聖人伝』が彼らの信仰の指標として支えとなっていたことを示すものである。

2．エラスムスと〝Devotio Moderna〟（「新しい信心」）

1600 年豊後臼杵（佐志生）に着岸したオランダ船リーフデ号の船尾に木造の異人像が取り付けられていた。これは，栃木県羽田の龍江院に伝存し，貨狄様と称されてきた。この像は現在重要文化財に指定されている。貨狄とは中国の黄帝の時代に初めて船を造った人物とされる。しかし，この木像異人像が右手にもった巻物には，ローマ字「ER[AS]MUS R[O]TE[RDA]M」と数字「1598」が読み取れる。これは，1598 年にオランダのロッテルダム港を出港した船に関するものである。リーフデ号の以前の船名がエラスムス号であった。旧船名のエラスムス号は守護者として「エラスムス」像を船尾に取り付け，船名の変更後もエラスムス像を守護者としていたようである。

エラスムス D. Erasmus（1466/69-1536）とはいかなる人物であるのか。彼はルネサンス期最大のユマニスト（人文主義者）とされる。社会思想史的には理想主義者としてユートピア思想を展開し，平和を強く訴えた神学者でありカトリックとプロテスタントとの和解を主張して諸国民の平和を唱えた（『平和の訴え』1517）。カトリックの君主カール 1 世の教育に当たり，『キリスト教君主教育論』（1516）を著している。アウグスチノ会の修道司祭になり(1492)，のち司教の財政援助を受けてパリ大学モンテーギュ学院に学んだ(1495)。その後，学僧としてヨーロッパを遍歴し，イギリス滞在中（1499-1500）にトマス・モアと交流して知遇を得ている。

1505 年に，ヴァッラ L.Valla が 1449 年に著した『新約聖書の注解』（Adnotationes in Novum Testamentum）を翻刻・出版した。彼は前年その写本を発見して大いに刺激を受け思想的影響を強く受けたとされる。1509 年にはその旅行中に諷刺文『痴愚神礼讃』を執筆し始め，教会と権力を辛辣に諷刺する一方で，人々の戦争癖を憂慮した。1511 年パリで出版された初版 1800 部はたちまち売切れた（二宮敬『エラスムス』，講談社，1984）。

新約聖書の原典批判に精力的に取り組んできたエラスムスは，1516 年２月バーゼルで『ギリシャ語正文新約聖書』Novum Instrumentum の校訂版を出版した。これは大きな波紋を巻き起こし，16 世紀末までに 229 版を数えたという。実際にこれは近世諸国語の新約聖書の底本となり，マルティン・ルターもドイツ語訳の底本とした。彼は，「言葉の正確な理解を基礎とした実証的・歴史的方法によって聖書・教父文学や異教古代の研究に先導的な役割を果たした。」（二宮敬『平凡社大百科事典』２）とされる。それは，少年時代の教育が，スコラ学よりも聖書や教父文学，古典を重視するデヴォティオ・モデルナ Devotio Moderna（新しい信心）運動の強い影響を受けたからと言われる（沢田昭夫『新カトリック大事典』１）。

エラスムスは少年時代（1475-84）をオランダのデフェンテル Defenter の共同生活兄弟会経営の寄宿学校で過ごした。同兄弟会が推進する「新しい信心」運動の精神を身に付けた。エラスムス自身は，得るところはなかったとのちに語っている（二宮敬『エラスムス』）。しかし，内面的で神秘的な「新しい信心」の流れをくむ教育を意識することなく受けていたことは否定できない。「新しい信心」運動では，聖書・教父の著述・古典が霊性の源泉として重視された。

両親の死後の 1486 年，彼は庶子という身分的制約のために後見人に半ば強制される形でデルフトに近いシオンのアウグスチノ修道司祭会修道院に入り，翌年友人に勧められてステインの同会修道院の修練士となり 1488 年には正式に修道誓願を立てて修道士となった。1493 年に彼は北仏カンブレーの司教の秘書となり，1495 年には司教の援助を受けて神学研究のためパリに留学し，パリ大学のモンテーギュ学院に学んだ。それから 33 年後の 1528 年にイグナティオ・デ・ロヨラが当学院に入って来る。

エラスムスは，当学院でスコラ哲学の方法論に対する批判の眼を養われることになる。

「新しい信心」Devotio moderna 運動とは，どのようなようなものであるのか？　この運動は 14 世紀末，ネーデルラントで始まり，15 世紀には説教や著作によってドイツ，ベルギー，スペイン，イタリアに浸透進出した霊性の刷新運動であり，特にライン川に沿ってドイツに進展したとされる。Devotio とは，神への奉仕のため神に自己を捧げること，福音書のキリストに従う愛の業を実行することによって神との親密な一致を追求し，神のみに献身することにあり，また Moderna とは，信仰体験による愛の追求，心情的諸機能の活性化，自我克服の修徳を志向することにある，という（鈴木宣明『新カトリック大辞典』II）。中世末期のスコラ学的思弁による真理認識を克服することにより，新しい信仰の在り方を求めて，信仰，希望，愛の日常体験を通して神なる汝と，人間なる我との一致の道を追求するものである。

Devotio moderna の父とされるフローテ Gerhard Groote（1340-84）は，オランダのデフェンテルの助祭・説教師であり，自分の家を共同生活姉妹会に提供して同会を指導した。フローテの友人（または弟子）ラデウィンス Florentius Radewijns（1350-1400）が中心になって共同生活兄弟会及び律修聖職者共同体を創設した（同兄弟会の創設者をフローテ，その後継者をラデウィンスとする説もある）。これは，従来のような厳格な修道会ではなく，俗社会にあって活動しながら一定の規則のもとに共同生活を行った。従って，「新しい信心」運動は，共同生活兄弟会やアウグスチノ修道祭式者会（同会はフローテに由来する共同生活兄弟会の人々によって 1387 年にオランダのツヴォレに設立された）によって推進された。彼ら修道士はフローテの霊性に従って托鉢を否認し，福音的生活の実践として使徒パウロの模範とした労働，特に筆写，製本，教育に従事し，自分達の手で働き共同生活の維持に努めた（鈴木宣明）。

「新しい信心」の霊性の特色は，同運動の初期の霊性家によって著述された「イミタティオ・クリスティ」De Imitatione Christi のうちに体現されているとされる。すなわち，①イエス・キリスト中心主義で，神の偉大さやその栄光よりもキリストの人性をその信仰の中心にして，この世におけるキリストの生涯について黙想しながら，キリストの人間的な

徳を自分の生活の模範にしようと努めることであった。これが，キリストの倣びである。さらに，②聖書を読むこと。これは，キリストを知るために信心深く読みながら，キリストとの出会いを求めキリストの道を深く知り味わうことを狙いとした。このことは聖書が各国語に翻訳されることを促した。聖書のみならず，教父の著述や中世の霊性家の書物を愛読することが勧められた。また，③霊的生活の自己体験が重視された。これは感性的な信心を奨励し，キリストの受難と聖体の秘跡におけるキリストの愛をじかに感取することを目的とした。④外面的な行為・行動よりも内的な信仰及び自省が重んじられた。また⑤厭世主義で孤独と沈黙が奨励された。⑥修徳に努めること。意志の努力と克己の精神が強調され，霊的書物の読書が勧められた。そしてこのために，⑦克己・修徳・黙想などの努力が一層効果的になるように様々な組織立った方法が模索された（チースリク「キリシタン書とその思想」『キリシタン書　排耶書』，日本思想大系，岩波書店）。

「新しい信心」Devotio moderna の発芽は 13 世紀に遡り，その言葉は，1420 年頃におこったとされる。13，4 世紀に主流であったスコラ哲学の影響下にかなり思弁的で観念的な「古い信心」が行われてきたのに対して，「新しい信心」は高邁な神学的な思索よりはキリストと共に生きる生き生きとした関係が重視された。その発端はアシッジのフランシスコに求められる。彼は「己を無きものにして」神の栄光を断念したキリストを理想とし，キリストの清貧と謙遜が最も端的に表れているベトレヘムでの誕生と十字架と受難を想起して，キリストの直弟子でもあるかのように，キリストの人間としての精神を自分の生活にあらわそうとしたために，キリストの人性が信仰生活の中心を占めるようになり，神がいわば人間的レベルで私たちと語り合われるという考えが強くなった，とされる（チースリク）。フランシスコの精神はその後継者ブエナベントゥーラによって受け継がれた。このようにして，「神なる汝と人間なる我」との対話がなされ，両者の一致に至る道が求められるようになった（鈴木宣明）。「いかにして神への信仰・希望・愛に生きるか」というキリスト教的人間実存を問い，神において被造物の無を超越する希望の霊性が，「新しい信心」において追求されるに至った。「信仰・希望・愛」の実践については，日本では 1591 年に出版された『どちりいな・きりした

ん』の序文において説かれたことはすでに言及したところである。

「イミタティオ・クリスティ」De Imitatione Christi et Contemptus ominum Vanitatum Mundi（「キリストの倣びと，この世のあらゆる空しきものを厭いて」）は，中世キリスト教文学の最高峰とされ，聖書についで最も広く愛読され諸国語に翻訳された。

著者については，古い多くの写本には著者名が一般に記されないため，明らかでなく，いくつかの説がある。従来，「新しい信心」運動で最も著名なトマス・ア・ケンピス Thomas a Kenpis（1363-1471）説が有力であったが，フローテ説あるいはカルトゥジア会の一修道者説（ネメシュギ『新カトリック大辞典』Ⅰ）が浮上し，またジェルソン Jean Charlier Gerson（1363-1429）説があり，「ジェルソンの書」と称された。14 世紀末頃，４巻にまとめられた本書が著されるが，修道司祭の手になったことは確実とされる。

３．イグナティウス・デ・ロヨラと「イミタティオ・クリスティ」

巡礼者イグナティウス（1491-1556）の巡礼は，1522 年に始まりスペインの聖地モンセラート Monsserat を訪問し，同山のベネディクト会修道院の礼拝堂の祭壇に武器を置いて，霊的戦士として生きることを誓った。マンレサ Manresa における修行と神秘的経験，そして霊的書物からの強い影響を受けて自ら霊的書物の執筆に着手した。彼が強い影響を受けた書物は次の二点であった。

１）シスネーロス Cisneros, “Exercitario de la vida espiritual”『霊的生活の修練』（1500）

２）“De Imitatione Christi et Contempus……mundi”

「新しい信心」運動は，プロテスタント運動がオランダ・ドイツを中心に急速に広まったために同地方では停滞し，スペインにおいて新しい展開を見せていた。モンセラートのベネディクト会修道院が同運動の拠点となっており，その指導者が同修道院の終生院長のシスネーロス Cisneros, Francisco Garcia de（1455/56-1510）であった。モンセラートを巡礼の中心地としてフェルナンド王とイサベル女王に聖地として認知させたのはシスネーロスであった。彼の上記著書は，修道者と巡礼者のため

の瞑想の手引き書であり，「新しい信心」の精神に則って書かれ，その運動の精神を強く受け継いでいた。イグナティウスがモンセラート修道院でこの手引き書によって黙想の指導を受けたことはごく自然なことであった。従って，シスネーロスは，中世の修道院的霊性とイグナティウスの『霊操』（『心霊修行』）との橋渡しの役割を担ったと言うことが出来る。

イグナティウスは，マンレサで『霊操』Ejercicios Espirituaes を執筆したが，「新しい信心」運動の精神に強く触発された。『霊操』にはシスネーロスと「イミタティオ・クリスティ」の影響が濃く見られる。黙想のテーマは一貫してキリストの一生についてであり，約 30 日間，4 週間にわたる修行・修養では，キリストの精神を基準として積極的に自分の人生観を形成することに向けられた。『霊操』は 4 部構成で，1 週間に 1 部を実践し 4 週間で全 4 部を終える。これは 4 巻からなる「イミタティオ・クリスティ」の構成に示唆を受けたのであろうか。宗教的修練を組織的に秩序づけて体系化し，4 週間にわたる実践方法が述べられる。同書には，マンレサにおける 1 年間の修行により得られた神秘的体験が強く反映され，また騎士道精神によって培われた彼の武人としての精神が脈打っていることも否定できないようである。神の恩寵に恵まれない者であっても努力によって，すなわち，宗教的修練によって克己心を養うことにより神と深く交わり，「その神的な全人類を包括する全体知・愛に基づいて，個人的な「真の自己」に目覚めるだけでなく，全人類に対する自己の使命を自覚することによって，全人類的な「真の自己」に目覚めることができる」（門脇佳吉訳・解説『霊操』）とする。

エルサレム巡礼を終えた後のイグナティウスは，1524 年乃至 1525 年にバルセロナで修学しラテン語を学んだ後，アルカラ大学でエラスムスの思想に触れることになる。アルカラ大学は，トレドの大司教兼枢機卿シスネーロス Cisneros, Francisco Jimenez de（1436-1517）により 1508 年に創設された（アルカラ・デ・エナーレス市の観光パンフレットによると，1499 年創設）。彼は自ら「イミタティオ・クリスティ」のスペイン語訳を行い，ラテン語・ギリシャ語・ヘブライ語からなる「多国語対訳聖書」の出版（1514-21）を促進したユマニストであり，従って，アルカラ大学がスペインにおける新しい人文主義教育の中心地，エラスムス思

想の温床地となって不思議はなかった。イグナティウスがモンセラートで読んだ「イミタティオ・クリスティ」は恐らくシスネーロスのスペイン語訳であったであろう。

文筆活動により当時のヨーロッパ世界に大きな影響力を与えていたエラスムスは，前述したように，1516 年に新らしいスペイン国王カルロス１世（後の皇帝カール 5 世）のために『キリスト教君主教育』を執筆してこれを献上したが，1518 年にはその再版が出ている。アルカラ大学にはラテン語の他に，ギリシャ語とヘブライ語講座が開設され，上述した「多国語対訳聖書」（コンプルトゥム版）の出版がシスローネスの死後も続けられた。なお，ラテン語・ギリシャ語・ヘブライ語の三カ国語教室は今も同大学に保存されている。

アルカラ大学における学問の特徴の一つは，パウロ研究にあった。パウロ研究は，アウグスチノ会のバルデス Juan de Vardes によって推進され，彼はルター同様に，信仰による義認の考え方に到達した。異端審問に異常な熱意を示したドミニコ会士の追求は，リベラルな思想家でカトリックとプロテスタントの和解のために尽力していたエラスムスにさえ度々及び,彼の思想がスペイン国内に広がりを見せた 1525 年にはさらにドミニコ会士の監視は強化されたようである。このような状況下にイグナティウスは同大学に学び，エラスムスの思想に接触した。その思想は，古典研究特にパウロ研究にあったごとく，キリスト教的ユマニスム（ヒューマニズム）の立場から，新時代のキリスト教徒の武器が〈祈りと聖書〉にあること，さらに聖書理解については中世的理解にとどまらず真の精神を悟るには準備段階としてギリシャ・ローマ異教古代の詩人や哲人の遺産にも親しむ必要があるとし，また真の信仰生活は各個人が聖書，とりわけその根幹である福音書とパウロの書翰とに直接触れあい，その精神と生きた実例に倣うことであるというものであった。

イグナティウスは，アルカラ大学で学んだ後，スペイン国内において自らの著述『霊操』の普及に努め，その指導にあたったが，ドミニコ会士によって，「カトリック信仰をエラスムス化する者」として批判され，異端告発を受けた。それは 1526 年とその翌年のことで，2 回にわたって宗教裁判にかけられ拘禁された。1528 年，彼はやむなくスペインを去り，パリに逃れ，すでに言及しように，パリ大学のモンテーギュ学院に

学ぶことになる。翌年，彼は聖バルバラ（バルブ）学院に移り，そこでフランシスコ・ザビエルとの運命的な出会いをした。ポルトガル国王が財政援助を与えていた当学院の院長ディオゴ・デ・ゴヴェアは，パリのモン・マルトルにおいてイグナティウスとザビエルを含む同志 6 人が 1534 年 8 月 15 日に三つの誓願を立てて結成した信心会がローマにおいて際立った活動をしていることを本国の国王ジョアン 3 世に報じた。ローマ駐在大使も同会の活動について国王に通報した。こうして，イエズス会がローマ教皇パウロ 3 世から修道会として正式に認可される前に，イグナティウスは，ポルトガル国王の要請を受けてザビエルをインドに派遣するためにローマを出発させた。なお，イグナティウスらが信心会を発足させた 1534 年に，アルカラ大学のバルデスは異端審問を逃れてナポリに移り住み，のちプロテスタントに改宗した。

4．キリシタン時代の「イミタティオ・クリスティ」

ザビエルが日本に伝えたキリスト教は，従来のカトリック教に変わりはなかったが，その信仰の在り方は中世以来のスコラ的思弁に基づく「古い信心」ではなく，イグナティウスが強い影響を受けた「新しい信心」運動に沿ったキリスト教信仰であった。ユマニスムの精神に則ったイエス・キリスト中心の教えを宣べ伝えるために積極的に採用された方法は，現地の社会にいかに適応するかということであった。日本の初期宣教においてザビエルを始めとしたイエズス会宣教師たちの多くは，日本の文化と習俗に深い理解を示してこれを尊重する姿勢を貫いた。ザビエルは日本人が農作に関連して気象や天文の事象について強い関心を持っているのを知って，自然科学の知識が日本の宣教に不可欠であることを認識し，来日する宣教師にその知識を要求した。

特に仏教用語の採用については，普遍宗教として仏教にはキリスト教に対応する概念があったから，ザビエルは熟慮してキリスト教の教理説明にそれに適応すると思われた仏教用語を宛てることを決断したのであろう。1552 年に来日したパードレ・バルタザール・ガーゴは，来日当初日本人の用いている言葉（仏教用語）によってキリスト教の真理を説いたが，これがキリスト教の宣教に誤解を招いていることを知って有害で

あると見なし，有害となりうる仏教用語 50 語を原語(ラテン語とポルトガル語）に変更した（1555 年 9 月 23 日，平戸発信の書翰)。ガーゴは同じ書翰において，日本人が仏教を有していなかったならば彼らがキリスト教を容易に理解することは困難であったろうというようなことを述べている。宣教師たちは，日本の宗教特に仏教について学習・研究することが宣教にいかに有益であるかを強く認識したから，ルイス・フロイスとオルガンティーノの両神父は京都において足利学校で学んだ一仏僧について法華経を読んだのであり，布教長フランシスコ・カブラルも元仏僧（ケンゼン・ジョアン）を伴って上洛してのち肥前口之津に戻ってからも久しく仏典についての講義を受けた。

日本の文化・習俗についての学習を痛感しこれを推進したのは，1579 年に来日した巡察師アレシャドロ・ヴァリニャーノであり，1581 年 10 月豊後において「日本の習俗と気質に関する注意と助言」（矢沢利彦他編訳『日本イエズス会礼法指針』）を著し，外国人宣教師が日本の礼法・礼儀作法に精通することが宣教の要諦であると強調した。

ところで，「イミタティオ・クリスティ」が日本にもたらされたことが記録乃至文書で初めて確認されるのは，1556 年 7 月である。この時来日したインド管区副管区長メルシオール・ヌーネス・バレトと，ガスパール・ヴィレラが携行したことが知られる。「1554 年付，ゴア発，メルシオール・ヌーネス・バレトが日本に携行した物品の一覧表」（東京大学史料編纂所編『日本関係海外史料　イエズス会日本書翰集』訳文編之二（上)）によると，

メルシオールの携帯書籍

「世の軽視」Comtempus Mundi (『キリストにならいて Imitatio Christi』　1 冊

「トマス・デ・ケンピスの作品」As obras de Tomas de Kempis (『キリストにならいて』を指す)　1 冊

ガスパール・ヴィレラの携帯書籍

「ジェルソン」Gersão　2 冊

なお，ヌーネス・バレトに同行して 1554 年にゴアを発ったイルマン・ルイス・フロイス（1561 年に司祭叙階）はマラッカにとどまったが，この時，「ジェルソン」，別名「大いなる願望」 1 冊を携行していた。彼が

1563 年に肥前横瀬浦に到着した時，おそらく同書を所持していたことは間違いないであろう。ザビエルが「イミタティオ・クリスティ」を日本に携行していたか否かについて明らかでないが，ヨーロッパにおける愛読書であるばかりでなく，我が父と尊敬するイグナティウスが強い影響を受け，その精神が『霊操』に息づいていることを考えれば同書は彼には必携の書物であったに相違ない。

『イミタティオ・クリスティ』は南ヨーロッパでは『コンテムツス・ムンヂ』と称されていたから，日本でもその呼称が一般的であったようである。その翻訳は早くより行われ，1580 年代初めには邦訳は完成し写本によって広く流布していたようである。『1581 年度イエズス会日本年報』によると，［臼杵の］ノビシアド（修練院）のために「コンテムツス・ムンヂ」が翻訳されたという。臼杵のノビシアドは 1580 年 12 月 25 日に開設され，ヴァリニャーノ自らがイエズス会の「会憲」や「日本のカテキズモ」を講義した。1582 年 2 月に長崎を出発した天正遣欧使節は，1585 年 5 月に教皇位についたシスト 5 世に謁見した折，日本語訳『コンテムツス・ムンヂ』の読者のために贖宥（インヅルゼンシャス）を与えられた。このことは，オックスフォード大学ボードレアン文庫本の表紙につづく遊び紙表に旧蔵者のメモ書きに見られる。即ち，「パッパ　シストより日本のコンパニャ（イエズス会）のパアデレ懇望によって授け給う御功力の事。誰にてもあれ，この経のうち一ヵ条を読む度ごとに十年のインヅルゼンシャスを蒙るものなり。ベアティシマ・マリア　尊とまれたまえ」（海老沢有道『キリシタン南蛮文学入門』教文館）。

大坂で宣教活動に従事していたパードレ・アントニオ・プレネスティーノは 1587 年 10 月 10 日付の書翰において，「私たちがすでに他の作品と一緒に日本語にしたジェルソン Gersone，……またコンテムツス・ムンヂも日本人たちが日本語で読むためにまもなく印刷される予定である」と報じ，さらに細川忠興夫人ガラシアが同書を愛読して侍女たちに読み聞かせている，と伝える。1587 年中に，あるいは翌年に国字本が木活字で印刷された可能性を示唆しているが，伴天連追放令の発令によってその計画は実現しなかったように思われる。キリスト教に改宗したばかりの細川ガラシアが愛読したとされるのは写本で流布していた「コンテムツス・ムンヂ」であったのであろう。

ローマ字本「コンテムツス・ムンヂ」が天草において印刷されたのは，1596 年のことである。「本年，Contemptus　Mundi がローマ字日本語 letra Latina y lengua japonia で印刷された。……またパードレ・イグナシオの Exercicios(『霊操』)がラテン語 en latim で印刷された」(「1596 年度日本年報」)。ローマ字本は現在 2 本が確認されている。オックスフォード大学ボードレアン文庫所蔵本は初版，ミラノのアンブロジオ図書館の 1 本は改訂版とされる（尾原悟『コンテムツスムンヂ』教文館)。

パードレ・ガブリエル・マトスが 1603 年 1 月 1 日に長崎において作成した「1602 年度日本年報」によると，1602 年に国字本が印刷された。「本年，日本人たちが好み大いに活用している Contemptus mundi が，日本の言葉と文字 em lingua, e letra de japão で印刷された。」尾原悟氏は，これは後藤版であろうとされる。長崎内町の年寄の一人後藤宗印は，イエズス会の印刷を請け負っていた有力商人であった。マトス神父が指摘するように，知識階層のキリシタンたちは「コンテムツス・ムンヂ」を愛読してこれを心の糧としていた。同神父は，1602 年に薩摩で死去した小西行長の旧臣で八代麦島城の城代であった美作殿即ち小西行重ディオゴ (ヤコボ) がこの霊的書物をたいへん親しく読んでいたことを，同「日本年報」において特記している。父の死後，その遺骨を母と共に長崎に運んだ息子ディオゴは，1614 年 11 月高山右近のマニラ追放に同行し，その死後に帰国した後 1627 年にマカオに渡航したが，「コンテムツス・ムンヂ」を手離すことはなかったといわれる（松田毅一『近世初期日本関係南蛮史料の研究』風間書房)。1602 年に印刷されたとされる国字本については現在なお未確認である。

1610 年 (慶長 15) には京都において国字本『こんてむつすむん地』（木活字本 em　taboas）が印刷された。「都の原田アントニヨ Farada Antonio の印刷所」の記銘がある。デイオゴ・メスキータ神父は木版での日本の文字を使用した印刷について，不完全ではあるが，「多数のキリスト教徒たちにコンテムツス・ムンヂを売るには都で印刷されるために大きな助けである」(総会長アクァヴィヴァ宛，1613 年 12 月 2 日，長崎発信）と評価している。この木活字による国字本は司祭や修道者に関わる数章が割愛されているが，これはメスキータ神父も指摘するように多数の一般のキリシタンを対象としたためである。従って，文章もローマ字

本(1596 年版)より平易になりこなれている。これには，原マルティニョが何らかの関わりを持ったのであろうか。メスキータ神父は同書翰の中で，原マルティニョが日本の言葉と文字に翻訳して再び改訂作業を行ったことで本書が優美さを添え，一層日本人の気に入るものとなっており，「私たちの印刷機で毎日 1300 丁を刷り出して，現在，1300 部が印刷されている」と報じている。この書翰が書かれて 2 ヶ月半後の 1614 年 1 月 28 日（慶長 18 年 12 月 19 日）に禁教令が発令されたために，印刷された同書が製本にされて頒布されたか否かは分からない。なお，新村出・柊源一両氏によれば，『こんてむつすむん地』と「地」を用いているのは，ムンヂが「世の」という義なので，音と意味との通ずる「地」という字を当てたのであろうかと，される（両氏校註『吉利支丹文学集』上，朝日新聞社)。また両氏は，本書はラテン語だけでも手写本 300 以上，版本 6000 以上を数えたのではとされる。

ラテン語原本，ロー字本及び国字本との関わりについて，その内容の省略は以下に見られるとおりである。ラテン語原本は合計 114 章，ローマ字本は合計 119 章,国字本は合計 68 章である。ラテン語原本にある「巻４」の序言は，ローマ字本と国字本にはない。ローマ字本は司祭と修道者を対象にしているため，原本に忠実な翻訳がなされたが，国字本は一般信徒に向けられたために，修道者らのための章は削除され，前述したように，文章は平易になり，漢字を平仮名に，片仮名を平仮名に改めて読みやすくしており，女性や庶民をも視野に入れたかのように思われる。

	〈ラテン語原本〉		〈ローマ字本〉	〈国字本〉	〈省略の章〉
巻 1	霊的生活に有益な訓戒	25 章	25 章	23 章	9，17
巻 2	内的生活に関する訓戒	12 章	12 章	9 章	8，9，11
巻 3	内的な慰めについて	59 章	64 章	31 章	2，6-10，13-14，21，23，26，30-34，38，40，42-43，51-54，56-59
巻 4	祭壇の秘跡	序言＋18 章	18 章	5 章	2-4，6，9-11，13-17

付記：本稿は 2008 年 3 月 1 日に,藤女子大学キリスト教文化研究所において講演した内容に基づいて文章化し，さらに増補したものである。